

2017年度長野原学研究会活動報告

土居洋平

Report on Activities by the Study Group of Naganohara in Fiscal Year 2017

Yohei DOI

はじめに

本研究会は、昨年度に学部教員である老川慶喜・鶴理恵子の呼掛け人となって設立された。詳しい設立の経緯は本紀要の前号（鶴、2017）に記してあるとおりであるが、今年度も群馬県吾妻郡長野原町をフィールドに、学部教員有志が各自の専門的な視点から研究を行っている。特に今年度は、大学特別研究助成費（研究課題：長野原町の観光とコミュニティに関する総合的研究、研究代表者：土居洋平、共同研究者：石崎裕子、老川慶喜、小川功、鍵屋一、塩月亮子、篠原靖、鶴理恵子、村上雅巳、安島博幸、矢野峰生、（50音順、順不同））の交付も受け、研究活動をさらに活発に行ってきた。

以下に、改めて研究の背景・目的・概要を記すとともに、今年度の活動概況について報告する。

1. 研究の背景と目的

近年、地域、特に地方においては人口減少や少子高齢化、大都市への過度の集中に伴い、地域経済の衰退や地域社会の基本的な組織（自治会・町内会等）の弱体化、老朽化するインフラの維持管理の困難化、児童・生徒数の減少に伴う地域で担う教育の衰退等、様々な問題が相互に関連し合いながら深刻化しつつある。

こうした中で、観光や移住者の獲得など外部の力を得た地域振興策や、地域資源を活かした新しい産業の創出等、様々な形で問題に対する取組みが進んでいる。しかし、多くの施策、取組みは個別の課題に対応して設計されることが多く、相互に問題が絡み合う現状においては、必ずしもそれらが有効に機能していたとは言えない。調査研究においても、特定の分野の視点による分析では、地域の課題の全体像を描くことが困難な状況に陥っている。

そこで、本研究においては、主に観光とコミュニティの課題に焦点を当てつつ、経済学、社会学、都市計画学、観光学等の多様な視点から、長野原町をフィールドにした共同研究を行う。個別の研究は、各々の専門分野に依拠して行いつつも、本研究の主眼は、各々の分野から提示された課題について、その相互の関連性を検討し、地方が抱える課題の全体像を明らかにすることである。また、その個別の課題について個別の解決策や対応を検討するのではなく、相互の関係性を意識しながら全体として地域課題を解決する方向に向ける方策を探る。

2. 対象地および研究の概要

研究のフィールドである群馬県長野原町は、北を草津温泉、南を軽井沢といった元来の観光地に加え、東に沼田、西に上田と今年度は大河ドラマの影響で観光客を多く集める地域に囲まれた地域であり、通過人口が多く、更なる観光振興に大きな可能性を宿した地域である。以前は、軽井沢から草津を結ぶ草軽鉄道が通っていた地域でもあり、その歴史的な遺産を活用した観光振興の可能性も考えられる。また、町内北部には八ッ場ダムが建設中であり、建設の是非や集落の移転等で、開発の爪痕がまだ色濃く残る地域でもある。さらに、町内中南部には、北軽井沢の高原別荘地を抱え、この地域においては二地域居住者や移住者も一定の数があり、新住民と旧住民の協働なども課題になっている地域である。町全体としては、人口減少（ピークの1995年の8349人から2015年には5477人に減少）や、それに伴

う学校の規模縮小や統廃合、老朽化した施設の更新や管理等、地方の自治体が一般的に抱えている問題も有している。

この長野原町と本学は、2016年4月19日に包括連携協定を結んだ。それに基づき、上述のように観光コミュニティ学部では長野原学研究会を開催するようになり、学部所属の教員の多くが参加する形で研究活動を実施してきた。また、2017年度は特に以下の研究活動を進めた。

(1) 長野原の開発・観光振興に関わる研究

長野原の開発・観光振興を焦点にした研究を行った。まず、その歴史的経緯（北軽井沢の開発史）、草軽鉄道の開発と廃止、宗教や民俗の関わり等を把握する研究活動を行った。また、現在の具体的な開発の状況や、それに基づく観光振興の課題と可能性について（八ッ場ダムを活用した観光振興・道の駅を活用した観光振興等）について研究を進めた。また、長野原町の観光計画の変遷と今後の展開について検討した。

(2) 長野原の地域コミュニティに関わる研究

長野原の地域コミュニティを焦点にした研究を行った。まず、長野原の地域コミュニティにおいて大きな課題であり続けた八ッ場ダムの開発とコミュニティへの影響について整理・把握した。また、近年、増加しつつありコミュニティへの影響も増しつつある移住者について状況を整理し、その地域社会への定着について検討を行った。また、今後は、火山噴火・地震を念頭にした長野原における防災コミュニティの構築について検討、地方の地域社会が一般的に抱えているジェンダーに関わる課題、コミュニティビジネスの振興に関わる課題、全般的な地域の振興について長野原における状況を把握する研究活動を推進する予定である。

(3) 課題の相互の関連についての研究

長野原の観光とコミュニティの抱える課題の全体像を明らかにすべく、各担当で進める個別の研究をもとに、定期的に研究会を開催し、課題の相互の関連についての検討を行った。

3. 研究の特徴

本研究は、本学観光コミュニティ学部に所属する多様な専門を持つ研究者が参画し、各々がその専門領域の視点を活かした研究をするとともに、その研究課題の相互関連性を並行して検討し、長野原の観光とコミュニティが抱える課題の全体像を示そうとしている。

こうした特定の地域を対象にした学際的研究は、戦後から1960年代にかけては「総合調査」として実施されてきたこともあるが、その中で行われる個別調査間の関係を検討し、全体像を描くに至らず、また、その後の学問の専門分化の流れのなかで、下火になっていった。近年、そうした専門分化が過度に進んだ結果、地域の抱える課題の全体像が見えなくなっているという反省から、再び、学際研究に注目が集まるようになってきている。しかし、多くの学際研究においては、未だその個別研究間の相互関係を踏まえ地域の抱える課題の全体像を提示するには至っていない。

本研究においては、特に各課題間の相互関係に研究当初から着目し、研究の出発点からその全体像の把握を試みている点で、特色があると考えられる。

また、一部研究は学術的な調査に留まらず、実際の観光振興・コミュニティ振興に関わる実践的な内容も含んでおり、総合的調査と実践の融合を図るという点においても、特色があると考えられる。特に、近年は、学術的な知見を実践的に活かすことが求められるようになりつつある。しかし、学術的研究を重視する研究者と現場における実践を重視する研究者の間には、多くの場合、問題意識・関心についての乖離が見られ、協働的な研究を実践することが困難な場合もあった。今回の研究には、その両方の研究者が参加しているが、平素から研究会において議論を重ねることで、協働できる関係性が構築されている。

さらに、本学と長野原町とは包括連携協定の締結や学園北軽井沢研修所の存在を背景に、本研究グループと町長以下、町行政はもちろん、町内の各組織（国出先機関、町内の学校、地域組織等）、各産業の担い手、移住者等との良好な関係性が構築されている。こうしたことから、研究の推進にあたっての障壁も少なく研究の実現性が担保されて

いることはもちろん、町内各組織と連携し研究成果を実践へと展開できるものとする。こうした、地域と連携した研究と実践の体制がすでに構築されていることも、本研究の特徴の一つである。

4. 今年度の研究会活動の概要

(1) 研究会の開催

今年度は、1月末迄に以下の通り6回の研究会を行った。以下に、各研究会の概要を記す。

1) 第1回研究会

第1回研究会は、2017年5月10日17:45~19:00にかけて、跡見学園女子大学新座キャンパス2号館2471会議室で開催された。11名が参加し、各々の研究計画などが報告され、相互の連携などが議論された。

そこで報告された研究テーマは、「湯かけ祭りの変遷」(鶴)、「ハッ場ダム建設後の観光振興」(篠原・村上)、「長野原町への移住」(土居)、「草軽鉄道の開発」(小川)、「浅間酒造と地域貢献」(塩月)、「地域ブランドの形成プロセス」(矢野)、「水源地域ビジョンのその後」(篠崎)、「北軽井沢の観光開発と資本」(老川)、「女子中学生の進路形成意識」(石崎)であり、各々の調査対象者や調査スケジュール、研究方法などが報告され、合同で実施できる部分等について検討が行われた。

2) 第2回研究会

第2回研究会は、2017年6月14日18:00~19:00にかけて、跡見学園女子大学新座キャンパス2号館2571会議室で開催された。9名が参加し「ハッ場ダム完成後の長野原町の自立に至る条件」(篠原)、「長野原町における高大連携」(村上)、「北軽井沢における戦前からの別荘地の開発」(安島)の研究計画についての報告が行われたほか、「湯かけ祭りの変遷—日常性の回復—」(鶴)と題した、研究の中間報告が行われ、研究内容に関する議論が行われた。

3) 第3回研究会

第3回研究会は、2017年7月26日18:00~19:30にかけて、跡見学園女子大学新座キャンパス2号館2571会議室で開催された。8名が参加し、「ハッ場ダム完成後の長野原町の自立に至る条件」(篠原)、「浅間酒造株式会社の歴史と地域貢献」(塩月)について、研究の中間報告が行われたほか、「中山間地域における早期避難対策の考察—要配慮者を中心として—」(鍵屋)の研究計画が報告された。また、中間報告について、研究手法等についてを中心とした議論が行われた。

4) 第4回研究会

第4回研究会は、2017年11月22日18:00~19:30にかけて、跡見学園女子大学新座キャンパス2号館2571会議室にて行われた。8名が参加し、「産業観光と食文化の関係性」(矢野)、「水没5地区の現状と課題—川原湯地区を中心に—」(鶴)と題した研究中間報告が行われ、研究内容についての議論が行われた。また、研究会の運営についての検討も行われた。

5) 第5回研究会

第5回研究会は、2017年12月13日16:30~18:00にかけて、跡見学園女子大学新座キャンパス2471会議室にて開催された。5名が参加し、各々の研究の進捗状況を確認したほか、調査を通じて得た情報の交換、今後の研究会の方針等について検討が行われた。

6) 第6回研究会

第6回研究会は、2017年1月17日15:00~17:00にかけて、跡見学園女子大学新座キャンパス2571会議室にて開催された。10名が参加し、「吾妻牧場と吾妻軌道—長野原の「上の段」と「下の段」を支えた二つの“馬”企業」(小川)

と題した研究中間報告が行われ、研究内容についての議論が行われた。また、研究会の運営等についても検討が行われた。

(2) 現地調査等の実施

1) 町内での研究活動推進に関する打合せ及び概況調査

2017年5月5月29日に、老川・土居の2名で長野原町役場を往訪し、中村剛企画課長と研究推進に関して調整を行い、また、一部の研究テーマに関する資料の所在や管理状況についての調査を行った。5月10日の研究会で報告された各自の研究テーマについて、具体的な対象者との調整や関連する組織等の紹介依頼を行い、概ね了解を得ることができた。また、開発・土地に関わる資料について所在を確認し、保存状況についての調査を行った。

2) 現地調査の実施と成果

上記に関連した調査を研究会参加者が各自で行っている。昨年度に引き続き、湯かけ祭りを行ってきた川原湯地区の調査を随時実施している（鶴）ほか、浅間酒造の歴史と地域貢献（塩月）、北軽井沢の観光開発史（老川）、長野原町の移住政策および移住状況（土居）、ハッ場ダム完成後を見据えた観光振興のアクションリサーチ（篠原・村上）などのテーマで、随時調査を行っている。また、その一部の成果は関連の学会で報告された（鶴理恵子、2017年9月24日、女性民俗学研究会「湯かけ祭りの変遷を通じた地域社会の変容」など）。また、成果の一部は本紀要にても報告されている。

5. 今後の研究活動に向けて

今年度は大学特別研究助成費の交付を受けて研究活動は活発化し、現在も継続的に研究・調査が実施されている。以上を踏まえ、次年度も引き続き研究会活動を継続し、今年度分も含めた研究成果を各所に公表するほか、次年度中に長野原町内において一般公開での研究会を実施する予定である。また、研究成果が蓄積された段階で、成果を書籍として出版化することも検討されている。

【文献】

鶴理恵子、2017、「2016年度長野原学研究会活動報告」『ATOMI 観光コミュニティ学部紀要』Vol2、pp.121-124